

わたしたちの人権 65

だれもが人間として生きていくうえで
 侵すことのできない当然の権利
 これが『人権』です

「同和」問題について

昨年度に実施した山都町人権・「同和」教育に関する町民意識調査の中で、「同和」問題のことがよく分かります。「今でも差別があるのでしようか」といった質問が寄せられました。そこで、本誌では、「同和」問題に関するいくつかの疑問についてお答えします。

1. 「同和」問題って、何ですか？

「同和」問題とは、日本固有の部落差別によつてさまざまな引き起こされる社会問題です。部落差別は、封建時代の政治や経済の仕組みの中で、人間心理を利用して人為的に作り上げられた身分制度に基づくものです。このような、まちがった社会意識が現代にも残されており、「同和」問題の解決を妨げる要因となっています。人間は自分の意思で生まれるところを選ぶことができなにもかわらず、「同和」地区出身というだけでさまざまな差別を受け、基本的人権を侵害されてい

る現実があります。これが「同和」問題であり、現代社会においてもなお、身元調査による結婚差別や就職差別などが大きな社会問題となつていきます。

2. 「同和」地区をなくせば、差別もなくなるのではないですか？

「被差別部落に住んでいるから差別されるのではないか」、「分散して住めば差別がなくなるのではないか」という意見を聞くことがありますが、身元調査による結婚差別や就職差別などでは、住む場所を変えれば差別がなくなるというわけではありません。部落出身であるとして、タレントや著名人の実名をあげてインターネット上で攻撃するという事例も見受けられます。

また、「分散して住んだ方がいい」という考え方は、差別する側でなく差別される側の問題であるという誤った認識によるものだといえます。

例えば、女性差別の問題は、女性の問題ではなく、男性による女性差別から引き起こされる社会問題です。また、障がい者差別の問題は、障がい者の問題ではなく、健常者による障がい者差別から引き起こされる社会問題です。つまり、部落差別の問題も、部落外の人の課題としてとらえなければなりません。

そもそも、「同和」問題の本質から目をそらした、「分散して住んだ方がいい」という考え方が大きい

な人権侵害といえるのではないのでしょうか。

3. 「同和」問題を教えるから、差別が広がるのではないですか？

「そつとしておけば自然になくなるのではないか」、「教えるから差別が広がるのではないか」といった意見を聞くことがあります。いわゆる「寝た子を起すな」という考え方です。しかし、この考え方を持った人の多くは、「同和」問題について正しい認識がなく、誤った事実や偏見が知らず知らず身に付いていることを自覚していないという問題点があります。子どもは、何の先入観も偏見もない真っ白な心の持ち主であり、初めから差別意識を持つて生まれてくる人はいません。そこに差別のおかしさを正しく教えれば、純粋な心からは差別に対する素朴な嫌悪感や怒りが生まれてきます。

逆に、そつとしておくと、周囲の何気ない言動によつて、「同和」問題に対する偏見や誤った考え方が植え付けられ、心の中に潜んでしまいます。そして、自分に関わりが生じたとき、心の中に潜んでいた偏見や誤った考え方が必ず表に出てきます。そのため、「同和」問題の解決のためには、「同和」問題を正しく知ることが必要になるのです。

「寝た子を起す」ということは、「同和」問題を知らない人が正しく認識することであり、誤った認識を持たされている人がその誤りに気づき、認識を改めることにつながります。

季節のうた

- ▼清和短歌会
 - 森林浴親しみつつ奥山路斜光一閃緑陰煙る 大塚叢司
 - 耳近くホーホケキョと鶯がはつきり鳴けり 原田恵美
 - 田植も終わる 渡辺辰男
 - 先祖より受け次し田畑荒らさじと腰痛こらえ
 - 田植えを急ぐ
- ▼馬見原酔山会
 - 縁台に尽きぬ話や青葉木菟 渡辺勝子
 - 初蛸捕へてそつと母の手へ 工藤美智子
 - 南州の辿りし屋根やぶな若葉 長谷野澄博
- ▼やまなみの会
 - 桜散る花びらの下子ども等は赤き傘降り 木下スエオ
 - ステップして 本田七郎
 - 御衣黄の花は青みて満開見上げる程に大きくなりて
- ▼通潤句会
 - ひかえ目に 是々非々語る吾亦紅 西田えい子
 - 一気かせいに短歌詠みゆく心地よさ一日十首 渡辺豊久
 - すらすらと成す 今村芳子
 - 退院の夫を迎ゆる花は葉に 水野信子
 - 溪流の音に囲まれ山女茶屋 赤澤扶光子
 - 若葉色使ひきつたる絵の具かな

8月の当番医

8月1日	矢部広域病院 (電話72-1121)
8月8日	瀬戸病院 (電話75-0111)
8月15日	蘇陽病院 (電話83-1122)
8月22日	高田整形外科 (電話72-1007)
8月29日	坂本クリニック (電話72-0210)

山都町の人

(平成22年6月30日現在)

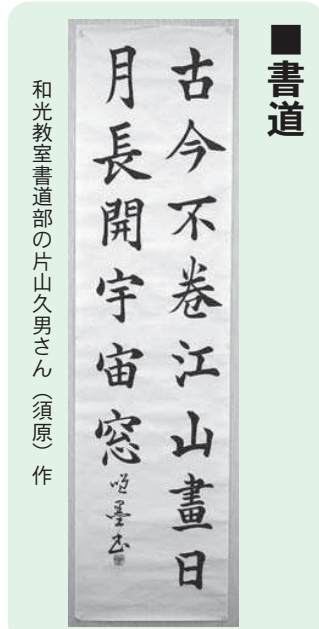
男	8,836人 (-7)
女	9,452人 (-21)
計	18,288人 (-28)
世帯	6,788戸 (+1)

※ () は前月比
 ※最高齢は105歳〔女性1人〕
 ※1月1日～6月30日の出生届数 47人〔うち6月は2人〕
 ※1月1日～6月30日の死亡届数 159人〔うち6月は20人〕

矢部中で知事出前ゼミ



7月1日、矢部中体育館で蒲島郁夫熊本県知事の出前ゼミが開かれ、矢部中生徒257人に県政や夢について語りました。公務の合間を縫った約1時間のゼミ。このなかで蒲島知事は「人生の可能性は無量大。夢を持ち行動することが大事」と未来の熊本を支える学生たちに伝えていました。



和光教室書道部の片山久男さん(須原)作

編集後記

「豊かな土を持たない国は滅びる」「輸入農産物は他国の土を略奪すること」5ページで紹介した富山和子氏の厳しい言葉の裏には、日本の自然と農林水産業を守ろうとする深い愛情が見えました。全国の山間地で離農や耕作放棄地が増えていきます。土が水を蓄えきれずに各地で河川の増水、氾濫が増えているのだそうです。それを防ぐために毎年河川工事に多額の予算がかかります。山間地を守ることは、都市部の生活を守ることだとみんなが気づいてほしい。「豊かな水は、豊かな土から」 (F)

訂正とお詫び

広報やまと7月号(6月23日発行)において、記事に誤りがありました。大変ご迷惑をおかけしました。お詫びして訂正します。
 ○(13ページ) 少林寺筆法 内
 (誤) 「大濱清光道院長」
 ↓(正) 「大濱清光道院長」